

## Sumitomo Foundation News Vol.17

### 住友コンフェレンス2023開催

「アジア諸国における日本関連研究助成」の助成対象者による成果研究会を10月15日（日）に開催しました。助成対象者を招いてこのようなイベントを実施したのは初めてのこととなります。

当財団の助成の一つ「アジア諸国における日本関連研究助成」の延長線上の取り組みとして、過去の助成対象者の研究成果を公表共有し、同じ分野の研究者同士や選考委員とが接する機会を醸成することを目的に、成果研究会としてオンラインにて開催しました。企画運営は、東京大学東洋文化研究所によるプログラム「Global Asian Studies」の一環として行われ、当財団からの助成により実施されました。

コロナ禍により2018年度以降の助成対象者は研究期間の延長を余儀なくされるケースが続出したことも鑑み、今回の発表者は2018年度の助成対象者から優秀な研究成果報告を選考委員に選出頂きました。

当日は90名余が参加。リード役（モデレーター、討論者）のスマートな進行も手伝って双方向の議論がなされ初回としては想像以上の出来となったのではないかと思います。来年度以降も継続する手応えを得ました。

このようなイベントは、アジア諸国と日本との相互理解を増進する、というプログラムの目的推進に適うものだと思います。引き続き助成金がより有効に使われるような助成活動の構築を模索して参ります。

#### 【当日のプログラム】

14:00- 挨拶 当財団 日野常務理事・事務局長

#### セッション1：植民地支配の遺産と歴史認識問題（日本語）

14:10- 林佩欣（台湾 国立台北大学）「東郷実と近代台湾農業調査体系の構築」

14:35- 朴敬珉（韓国 国民大学校）「在朝日本人/朝鮮引揚者による日韓請求権の歴史的問題 1945-1965」

15:00- 討論者 福田円教授（法政大学）

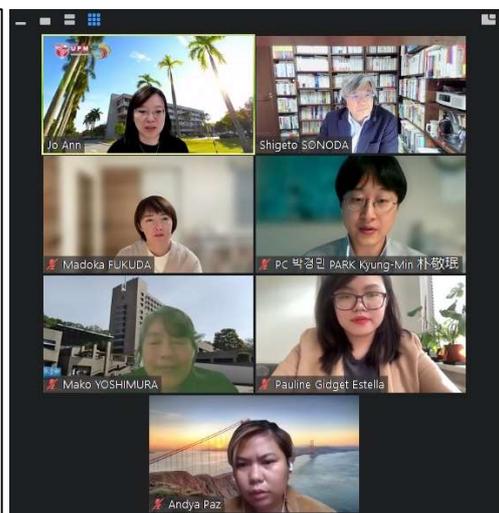
#### セッション2：日本とアセアンを比較する（英語）

15:25- ホー・ジョアン（マレーシア プトラ大学）「臓器移植に対する態度と意識に関する日本とマレーシアの大学生の比較研究」

15:50- ポーリン・ギジェット・レストリア・エストラ（フィリピン国籍 独イルメナウ工科大学）「グローバルなジャーナリズム能力と教育の問題」

16:15- 討論者 吉村真子教授（法政大学）

16:40- 総括討論（英語・日本語） 園田茂人教授（東京大学）



討論セッションでのスピーカーの皆さん

### 主な活動内容（2023年8月～10月）

|         |                                    |
|---------|------------------------------------|
| 9月      | 2023年度 基礎科学研究助成 環境研究助成 第2回選考委員会 開催 |
| 9月～10月  | 2023年度 アジア諸国における日本関連研究助成 募集        |
| 10月     | 第63回理事会開催                          |
| 10月～11月 | 2023年度 国内外文化財維持・修復事業助成 募集          |

## 活動報告

### 基礎科学研究助成

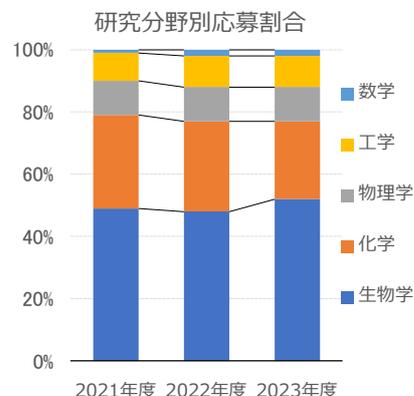
2023年度は、例年通り4/15～6/30募集、選考を経て、10月理事会で助成対象が決定されました。

#### 【応募状況】

応募件数は920件と昨年度より14%増加しました。新型コロナウイルスの影響と思われる応募件数の大幅減少がみられた2020年度以降では最も多い件数となりました。

また、申請金額の平均は2017年度以降増加傾向にあります。今年度も昨年度を上回り、334万円となっております。物価や人件費の上昇の影響を受けた研究費の上昇も背景にあるものと考えています。

応募の分野別割合の上位は、生物学52%、化学25%、物理学11%でした。応募の多い分野の順位に変動はありませんが、生物学の割合が過去最高になったことが特筆されます。



#### 【選考・採択状況】

選考は、例年通り選考委員長を含む13名の選考委員によって2回の選考委員会を通じて実施されました。コロナ禍ではリモートでの開催が中心となっておりましたが、今回は2回ともにほぼ全員の委員が会場参加され、対面でのやりとりが行きかう選考委員会となりました。

第1回の選考委員会で、将来的なプログラムの見直しが議論となったことで、論点となった若手研究者や助成金額について、各委員が改めて課題意識をもって選考が行われた結果、助成金額は例年通り1.5億円となる中で、採択件数は85件と昨年比12件減となりました。採択件数が減った分助成金額の平均は176万円と昨年比22万円アップし、1件当たりの助成金額の充実が図られました。

採択者の平均年齢は39.7歳と、昨年38.7歳から1歳上昇しました。生物学の分野の採択者の平均年齢が高かったことによるものですが、なぜそうなったかについて、生物学の分野の研究や研究者の特性も含めた議論が選考委員会でありました。若手研究者の捉え方や評価について、引き続き検討していくことが課題として残されることになりました。

#### 【助成対象者の紹介】

今年度最年少（26歳）の助成対象者をご紹介します。

北海道大学大学院生命科学院 大学院生 越後谷 駿さん  
研究テーマ「細胞とのインタラクションを通じた単細胞生物の外空間認識方法の解明」



##### ○応募のきっかけ

所属学会メーリングリストからのお知らせや指導教員からの勧めでした。幅広い理学の基礎研究を対象としており、はっきりどの分野とも言い難い自分の研究に合致していそうだと思います。

##### ○助成が決まった感想

過去の採択者の方を見るとほとんど大学院生はおらず、採択していただけたとは正直思っていませんでした。学振PD等も不採択続きだったため、うれしいと同時にやりたいことをガンガン進めていこうと自信にも繋がりました。

##### ○このテーマを取り上げた理由

本研究では単細胞生物ソライロラップムシの空間把握方法の解明を目指します。ソライロラップムシは青緑色をした細胞でとても鮮やかです。その鮮やかさに魅せられたのが最初のきっかけです。ただその飼育は難しく、「何で死んでしまうんだ、ラップムシの気持ちがわからない…」と思いながら培養しているうちに、彼らとコミュニケーション？（インタラクション）出来たらいいのになと思うようになりました。ついペットに話しかけたり、ちょっかいをかけて反応を見るのと同じような感覚だと思います。そんな想いを本研究テーマで実現させたいです。

##### ○今後やりたいこと

単細胞生物は数億年前に誕生した原始的な生き物ですが、形も動きも棲んでいる環境も様々です。観察や飼育を重ねれば重ねるほど色んな行動が見えてきて、それぞれトガった生き方をしているように感じています。しかしそれらの行動の意味はよくわかっていないことが多く、まだまだ不思議な行動で溢れています。本研究テーマはラップムシだけでなく、多くの原生生物に応用できます。今後も、多様な原生生物の生存戦略解明という終わりの見えないテーマに愚直に取り組んでいきたいと思っています。



ソライロラップムシ  
(体長約1mm)

## 活動報告

### 環境研究助成

2023年度は、例年通り4/15～6/30募集、選考を経て、10月理事会で助成対象が決定されました。

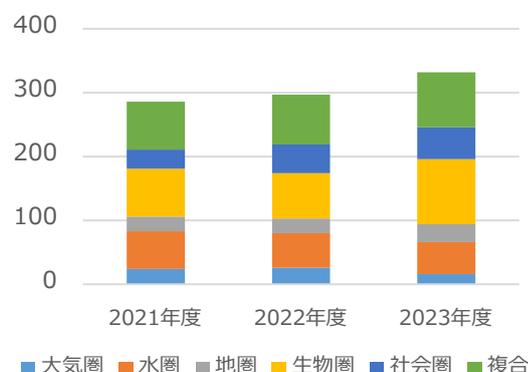
#### 【応募状況】

2023年度のお募は、一般研究332件（前年度比+35件）、課題研究28件（同+11件）の合計360件（同+46件）となり、コロナ禍の影響により応募件数の大幅減少がみられた2020年度から順調に回復基調にあります。

一般研究申請の分野別推移は、右表の通りです。今年度も環境問題にかかる分析・調査から対応技術、社会科学的探究も含め多岐にわたる申請がありました。特に生物圏分野の申請が大幅に増加しました。一方、他の分野は、ほぼ前年並みの水準となりました。

課題研究は、「激動の時代における環境問題の理解および解決のための学際研究または国際共同研究」を募集課題としましたが、前年度の応募数17件に対し28件と大幅な増加となりました。

環境（一般研究）分野別応募件数推移



#### 【選考・採択状況】

今年度の選考も、昨年同様、選考委員長を含む7名の選考委員によって2回の選考委員会を通じて実施されました。採択は、一般研究が35件（総額7千万円）、課題研究が4件（総額3千万円）の合計39件（総額1億円）となりました（前年度は一般研究39件、課題研究3件の42件）。

一般研究については、応募数の増加に対して採択数が減少した結果、採択率は、前年度の13.1%に対して10.5%へ低下しました。分野は、自然科学系29人、人文社会科学系6人となり、所属機関別では25機関に分散しております（最大は東京大学4件）。採択者の平均年齢は45歳となり、27歳から60歳まで幅広く分布しております。また、女性の採択者は9名となり、女性の採択率17.3%は、全採択率10.5%を大幅に上回っております。助成金額は、平均200万円、最大460万円、最小40万円となり、申請額に対する充足率の平均は60%となりました。

一方、課題研究については、いずれも社会的インパクトが大きい4研究が採択されました。2024年度の募集課題は「人類喫緊の課題である温室効果ガスの大気圏への蓄積の抑制に向けた学際研究または国際共同研究」の予定です。

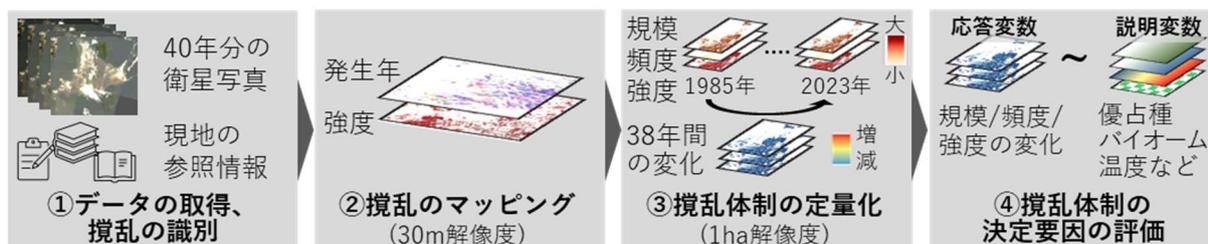
#### 【採択された研究テーマ事例（一般研究）】

「日本全国の森林における自然撓乱の時空間的定量化：衛星写真による撓乱マッピング」

（東京大学 先端科学技術研究センター 鈴木紅葉特任研究員他3名による共同研究）

本研究は、日本全国の森林の過去40年間にわたる自然撓乱（台風による風倒や斜面崩壊）をリモートセンシングや長期観測データ、既存文献を用いて統合的に解析し、世界的にも包括的理解が不十分である「撓乱体制の決定要因」の解明に挑む。森林の健全性や回復力を高める森林管理につながるものとして大きな波及効果が期待できるものです。

<本研究の流れ>



鈴木さんから採択決定に際し、以下コメントがありました。

『現在の自然撓乱だけでなく、過去に起きた撓乱（撓乱履歴）も森林生態系に影響を与え続けることがわかっています。本研究では、東西・南北に長く複雑な環境要因を有する日本の特色を活かし、全国の撓乱履歴を網羅的に可視化・定量化します。本研究により、局所スケール～国スケールの様々な森林科学研究のベースラインとなる情報提供を行いたいと考えています。』

## アジア諸国における日本関連研究助成 (応募勸奨活動の狙い)

「アジア諸国における日本関連研究助成」プログラムは財団設立当初から30年以上に亘り実施されているプログラムです。

各国の首都を中心とした大学などからは、継続的に多くの応募があるものの、プログラムの存在を知らない地方の大学や、地方都市の大学の日本研究者や日本に興味を持つ研究者に対しても広くプログラムを紹介するために、出張に際しては、訪問国の地方都市も積極的に訪問するようにしています。

例えばインドネシアですが、面積は日本の約5倍で、南北に約1,900キロ、東西に約5,100キロに広がり、多数の島によって構成される人口約2億8千万人の非常に大きな国です。

応募勸奨にあたっては、首都のジャカルタだけではなく、西ジャワ州のバンドン、中部ジャワ州のスマラン、ジョグジャカルタ、東ジャワ州のスラバヤ、マランの大学を訪問しています。

また、ジャワ島以外にも足を伸ばし、スマトラ島のメダン、アサハン、バリ島のデンパサール、スラウェシ島のマカッサルなどの大学も訪れています。このような地道な訪問活動とオンラインでの説明会の開催などにより、近年インドネシアからの応募件数は増加傾向にあり、広くプログラムが同国内の研究者にも知られるようになったと思われます。



## インターン受け入れ

(公財)公益法人協会が毎年大学生のインターン受け入れを行っていますが、そのプログラムの一環として、8月24日に住友財団に学生5名の来訪がありました。

「若い人たちに公益法人への関心と理解を深めてもらい、将来の担い手となることを期して実施する」という目的で行われているインターン受け入れですが、参加者に対しては、住友財団の事業を説明した上で、住友グループの歴史や事業精神についても説明することができました。

参加者からは、「企業財団でありながら各企業の利益に直接は結びつかないかもしれない社会貢献を目的としていることに感銘を受けた」「国を超えた相互理解に繋がる国際交流の大事さを改めて感じた」「文化財の維持保存には様々な人たちの努力があることがよくわかった」などの感想がありました。



学生への説明の様子

## 第63回理事会開催

10月6日、第63回理事会が開催されました。今回もWeb参加者3名を加えたハイブリッドでの開催でした。「基礎科学研究助成」及び「環境研究助成」の助成先に加え、「その他助成」として「国際生物学賞委員会」への助成が決議されました。

また、プログラム見直し検討の進捗状況が報告されました。その内、アジア諸国における日本関連研究報告会については、1面でご紹介していますが、修復文化財の展示事業助成については、次号で詳細をご紹介する予定です。



理事会の様子